

令和 7 年度

北海道立総合研究機構
道南農業試験場年報

令和 8 年 6 月

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構
農業研究本部 道南農業試験場

資料の取り扱い

本資料掲載の研究成績等については未公開のものであるため、複製、転載及び

引用に当たっては、必ず原著者の了承を得た上で利用して下さい。

目 次

I	概 要	- 1 -
1.	沿 革	- 1 -
2.	位置及び土壌	- 2 -
3.	面積及び利用区分	- 2 -
4.	機 構	- 2 -
5.	職員	- 3 -
6.	歳入歳出決算額	- 4 -
7.	建 物	- 5 -
8.	新たに設置した主要施設及び備品	- 5 -
II	作 況	- 6 -
1.	気象概況	- 6 -
2.	当场作況	- 9 -
III	試験研究及び地域支援活動の概要	- 11 -
1.	生産技術グループ	- 11 -
2.	作物病虫グループ	- 11 -
IV	試験研究及び地域支援活動の課題名	- 13 -
1.	生産技術グループ	- 13 -
2.	作物病虫グループ	- 15 -
V	試験研究成果の公表	- 18 -
1.	技術普及に移された成果	- 18 -
2.	論文、資料および刊行物	- 18 -
VI	研修及び技術支援	- 21 -
1.	研修の受け入れ	- 21 -
2.	技術支援	- 21 -
3.	参観・視察者対応	- 25 -
VII	その他の活動	- 25 -
1.	職員研修	- 25 -
2.	主催事業等	- 25 -
3.	マスコミ対応	- 26 -
4.	委員会活動	- 27 -
5.	場内研修	- 28 -
6.	表彰・資格	- 28 -
7.	外部委員会等への参加	- 28 -
VIII	自己点検	- 30 -
1.	令和7年度計画に係る項目別実績の自己点検結果	- 30 -
付表1.	作物標準栽培法の概要	- 31 -
付表2.	土壌の理化学的特性	- 32 -

I 概要

1. 沿革

1) 戦前

道南農業試験場は、明治42年、亀田郡大野村（現在の北斗市）に北海道庁立渡島農事試験場（総面積9.85haの内、畑0.46ha、水田0.40ha）として開設された。翌43年には北海道拓殖計画に基づく農業試験機関の統合により国に移管され、北海道農事試験場渡島支場と改称、水稻、麦類及び豆類などの試験に着手した。

明治44年には果樹（りんご、なし類、おうとう、ぶどう及びもも）の栽培を開始した。さらに、大正7年からは水稻品種改良に純系分離育種法を取り入れるなど、道南地方の自然条件に適合する稲作、畑作及び園芸の試験研究を推し進めた。その間、水稻、大豆などで多くの優良品種を育成するとともに農業経営方式の確立に努め、地域農業の発展に貢献した。昭和17年には北海道農業試験場渡島支場と改称した。

2) 戦後

昭和25年、全国農業試験研究機関の整備統合により従来の機関は国立、道立に二分され、当時は道費支弁の北海道立農業試験場渡島支場となった。昭和28年、大野町字向野に用地3haを買収して果樹園を移設し、さらに昭和36年からは庁舎、調査室及び作業室等施設の整備拡充計画を推進した。

昭和39年、道立農業試験場の機構改革により北海道立道南農業試験場と改称した。昭和46年には、施設園芸の近代的推進の中核的役割を果たす農業者及び技術指導者などを養成する目的で施設園芸の研修施設としては道内最大のプラスチックハウス（約0.1ha）を設置した。さらに昭和56、57年にはコンピューター制御による環境制御温室と地温制御温室の完成を見ている。昭和62年には全国的な「農業試験研究情報システム」整備の一環として情報処理室を設置し、道立農業試験場各場間を結ぶ情報ネットワーク（HARIS）が整備された。その結果、各種農業情報や研究情報などの有効利用が促進されることとなった。

平成元年、完全自動化された花き省エネ栽培温室を設置し、同3年には植物馴化装置（3連グロースキャビネット）を導入し、翌年には米の食味分析計を整備した。なお、果樹試験は、研究基本計画に基づく機構改正により平成4年3月31日をもって道立中央農業試験場に統合された。

平成6年、前年の大冷害の経験から冷水田の整備が行われ、水稻品種の耐冷性強化のための新たな施設が完成した。平成7年には、庁舎の増改築が行われ高精度実験室や50人規模の会議室が新設されたほか、専技室に技術相談室が整備された。

平成12年、水稻優良品種開発施設として稲の世代促進を目的とした年3期作が可能な水田温室と管理棟が完成し、13年から本格的な品種開発試験を開始した。また、平成12年の研究科の再編統合に伴い、機動的な研究体制とするために、園芸科と土壌肥料科が統合され、「園芸環境科」が誕生した。さらに、専門技術員室は専技と研究職の次長からなる、研究成果の実証・体系化を行う「技術普及部」に改組され、研究部（園芸環境科、病虫科、作物科、管理科）とあわせて2部体制が敷かれた。

その後、本道農業を巡る情勢の変化に伴い平成18年より道南圏（渡島、檜山）における園芸を主とした地域対応研究に特化した場と位置づけられ、水稻、いちごの育種担当場から品種開発支援場となった。同時に組織の再編も行われ、研究部は、作物、栽培環境、病虫および管理科の4科となった。一方、技術普及部には部長以下、次長、主任普及指導員（旧主任専技）、地域支援の主査が配置された。

3) 独法後

平成22年4月、道立試験研究機関の地方独立行政法人化に伴い、これまでの北海道立道南農業試験場は、地方独立行政法人北海道立総合研究機構農業研究本部道南農業試験場に改組された。研究部は地域技術、生産環境グループの2グループ制となり、2研究主幹ならびに主査（作物）、主査（栽培環境）、主査（病虫）および主査（地域支援）が配置された。普及指導員は、北海道農政部生産振興局技術普及課の道南農試在勤技術普及室として配置されることになり、上席普及指導員、主任普及指導員および主査（地域支援）の3名体制となった。旧技術普及部の普及センター等関係機関に対する地域支援業務は、技術普及室の3普及指導員（30年より上席及び主任の2名）および地域技術グループ研究主幹、主査（地域支援）により対応することとなった。28年には、新しく育苗ガラス温室を整備した。令和2年度の機構改革により、研究部が生産技術グループと作物病虫グループに再編された。

2. 位置及び土壌

當場（北斗市本町 680 番地）は、北緯 $41^{\circ} 53'$ 、東経 $140^{\circ} 39'$ 、海拔 25m に位置し、JR 函館本線新函館北斗駅から南に 3 km、函館市の北約 20 km のところにある。地形は平坦で、土壌は褐色低地土（河成沖積）に分類される。水田土壌は腐植を含む埴壌土（減水深 30～40mm/日）である。40～50cm 以下は砂礫層となっている。作土の粘着性、可塑性がやや強く、硬度（ち密度）は約 18mm、鋤床層で約 22mm である。斑鉄は作土でやや

少なく、鋤床層でやや多い。マンガン斑は作土、鋤床層ともに観察されない。なお、作土深は12cm余、鋤床層は8~15cmでやや厚い。

一方、畑地では表層に腐植を含む壤土が分布しており、次層は壤土～砂壤土、50～70cm 以下は礫にすこぶる富む砂壤土～礫層となっている。構造は不鮮明であるが、孔隙がやや発達し、保水性は中庸で、粘着性、可塑性がやや強い。全般に膨軟で礫層の深い所まで根が分布している。

3. 面積及び利用区分

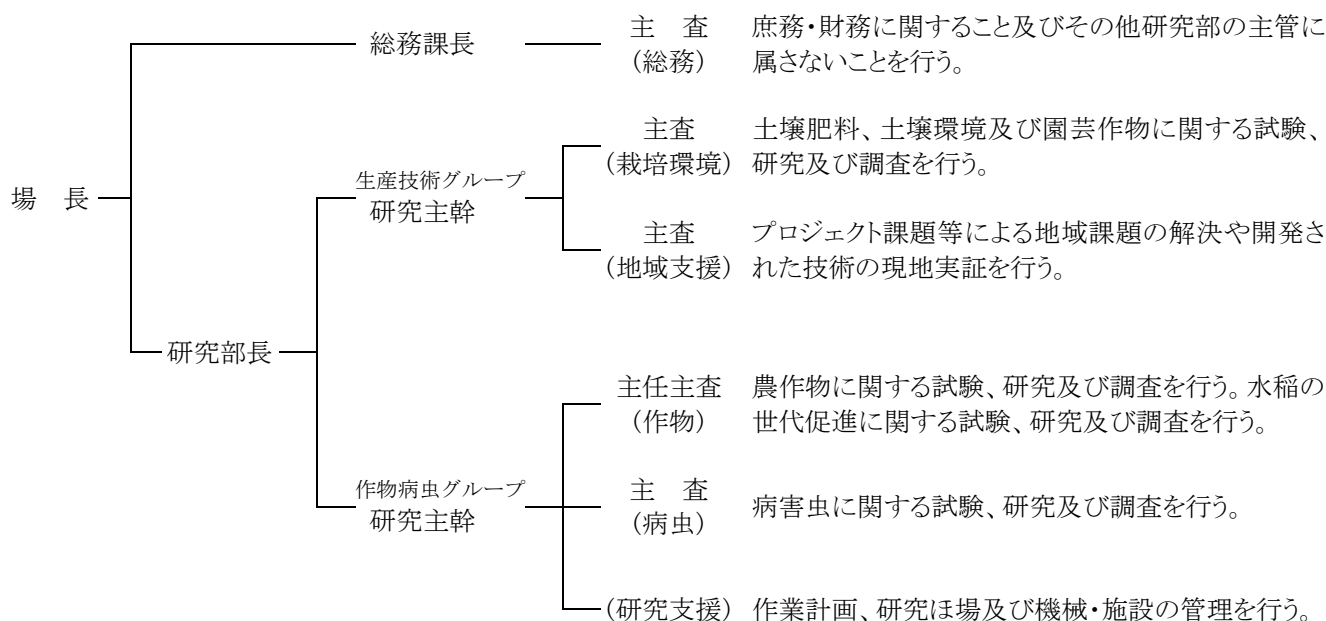
総面積 127,202 m²

区 分	面 積	区 分	面 積
構 内 建 物 用 地	20,372㎡	試 験 ほ 場 （ 畑 ）	37,290㎡
道 路	10,530	〃 （ 緑 地 管 理 ）	24,715
防 風 林	2,170	そ の 他	17,125
試 験 ほ 場 （ 田 ）	15,000	計	127,202

※借地も含む。

4. 機 構

(令和8年3月31日現在)



(参考)

技術普及室（北海道農政部技術普及課、道南農試に常駐）

上席普及指導員一主任普及指導員

5. 職員

1) 職員数（令和8年3月31日現在）

	場長	研究部長	総務課	生産技術 グループ	作物病虫 グループ	計
研 究 職	1	1		6	5	13
行 政 職			4			4
研究支援職					3	3
計	1	1	4	6	8	20

2) 現在員（令和8年3月31日現在）

職 名	氏 名	職 名	氏 名
場 長	三好 智明	[作物病虫グループ]	
[総務課]		研究主幹	三澤 知央
総務課長	森田 哲也	主任主査(作物)	鴻坂扶美子
主査(総務)	三上 幸規	主査(病虫)	青木 元彦
技 師	石川 大樹	研究主査	池田 幸子
主 任	小原 広昭	研究主任	丸田 泰史
[研究部]		専門主任	佐々木盛久
研究部長	五十嵐俊成	専門主任	竹内 達哉
[生産技術グループ]		主 任	岩崎 麻美
研究主幹	櫻井 道彦		
主 査(地域支援)	内藤 学	[技術普及室]	
主 査(栽培環境)	江原 清	上席普及指導員	高田 勲
研究職員	菅原 魁人	主任普及指導員	大平 誠
研究職員	田村 救		
研究職員	溝手 桃花		

※技術普及室職員の所属は、北海道農政部生産振興局技術普及課（道南農業試験場駐在）

3) 転入者及び新規採用者

職 名	氏 名	発令月日	備 考
研究部長	五十嵐俊成	7.4.1	中央農試水田農業部から
生産技術グループ 研究主幹	櫻井 道彦	7.4.1	農研本部企画調整部（道庁）から
生産技術グループ 主査	内藤 学	7.4.1	畜産試験場から
作物病虫グループ 主任主査	鴻坂扶美子	7.4.1	中央農試作物開発グループから
技術普及室 上席普及指導員	高田 勲	7.4.1	
技術普及室 主任普及指導員	大平 誠	7.4.1	

4) 転出者及び退職者

職 名	氏 名	発令月日	備 考
場 長	三好 智明	8.3.31	退 職
技 師	石川 大樹	8.3.31	根室振興局

6. 歳入歳出決算額

1) 歳入決算額

(単位：円)

予 算 科 目	決 算 額	備 考
農産物売払収入	873,600	
不用品売払収入	10,000	
法人財産使用料等	306,456	
施設等使用料	10,650	
その他雑収入	171,799	
共同研究費収入	1,500,000	
国庫受託研究収入	340,000	
道受託研究収入	3,463,650	
その他受託研究収入	5,549,000	
合 計	12,225,155	

2) 歳出決算額

(単位：円)

予 算 科 目	予 算 額	決 算 額	備 考
業 務 費			
重点研究費	426,000	426,000	
経常研究費	14,854,000	14,654,594	
技術普及指導費	222,000	222,000	
研究用備品整備費	4,485,800	4,485,800	
維持管理経費（研究）	949,000	949,000	
依頼試験費	5,100	5,100	
外部資金等確保対策費	31,000	30,190	
一般管理費			
維持管理経費	28,222,000	28,161,119	
運営経費	28,545,950	28,235,832	
受託研究等経費			
共同研究費	1,500,000	1,500,000	
国庫受託研究費	340,000	340,000	
道受託研究費	3,463,650	3,463,650	
その他受託研究費	5,547,008	5,547,008	
合 計	88,591,508	88,020,293	

7. 建 物

1) 公用財産

	本 町			向 野		
	棟数	面積(m ²)	建築年次	棟数	面積(m ²)	建築年次
庁 舎	1	969.12	S36. S54. S62. H7	1	66.42	S63
記念館	1	132.23	T 8			
ポンプ室	1	8.55	S44. H23			
調査室	1	165.25	S44			
物品庫	1	66.11	S45			
燃料庫	1	8.30	S45			
ポンプ小屋	1	3.31	S45			
便所	1	9.72	S26			
ガス格納庫	1	4.95	S49			
環境制御温室	1	534.15	S56. S57			
総合倉庫	1	133.85	S58			
管理科兼土壌実験室	1	197.35	S59. S61			
車庫	1	100.75	S60			
果樹品質調査室	1	655.92	H 1			
花き省エネ栽培温室			H 2			
農機具格納庫			H 3			
作業室			H 4			
昆虫飼育実験室			H 5			
土壌病害虫総合実験温室			H5. R5			
便所			H 7			
揚水舎	1	243.00	H 9	1	2.25	S42
ポンプ室			H10. H12			
農業資材倉庫			H15			
水田温室			H28			
運搬車用車庫			H29			
育苗ガラス温室						
トラクター車庫						
計	25	6,901.69		2	68.67	

8. 新たに設置した主要施設及び備品

(単価 50 万円以上、単位：円)

品 名	規 格	数量	金 額	備 考
グロースチャンバー	MLR-352-PJ	1	1,232,000	
人工気象器（クローズド型）	LPH-411PFPT-SP10	1	2,365,000	
多容量土壌 pF測定器	DIK-9223、DIK-3424-11	1	1,928,000	
乗用 4 条植え田植機（側条施肥付き）	YR4C、F	1	1,254,000	
ハイパーカルチ	V500N-2L	1	1,507,000	
冷却高速遠心機	H-9R 型	1	1,815,000	

Ⅱ 作 況

1. 気象概況

根雪始は平年に比べ3日早く、根雪終は6日早く、積雪期間は平年より3日短かった。また、耕鋤始は1日遅かった。晩霜は20日早く、本年の初霜は10月25日で平年より2日遅かった。無霜期間は23日長かった。

4月：平均気温は平年並、最高気温は1.2℃低く、最低気温は1.8℃高かった。降水量は平年より20.9mm多く、平年の131%であった。日照時間は89.4時間少なく、同53%であった。

5月：平均気温、最高気温、最低気温ともに平年並であった。降水量は平年より1.6mm多く、平年の102%であった。日照時間は27.9時間少なく、同87%であった。

6月：平均気温は2.1℃、最高気温は2.7℃、最低気温は1.7℃高かった。降水量は平年より33.7mm少なく、平年の71%であった。日照時間は26.4時間多く、同116%であった。

7月：平均気温は2.7℃、最高気温は3.6℃、最低気温は2.4℃高かった。降水量は平年より34.1mm少なく、平年の65%であった。日照時間は14.8時間多く、同111%であった。

8月：平均気温は1.5℃、最高気温は2.3℃高く、最低気温は平年並であった。降水量は平年より121.4mm多く、平年の177%であった。日照時間は48.0時間多く、同135%であった。

9月：平均気温は1.4℃、最高気温は1.7℃、最低気温は1.1℃高かった。降水量は平年より122.0mm多く、平年の207%であった。日照時間は22.0時間多く、同113%であった。

10月：平均気温、最高気温、最低気温ともに平年並であった。降水量は平年より68.2mm少なく、平年の36%であった。日照時間は19.9時間少なく、同88%であった。

農耕期間中(5～9月)の気温、降水量及び日照時間の推移を平年と比較すると以下の通りである。

平均気温：月別では4、5、10月は平年並で、6～9月は高かった。なお旬別では4月上旬、5月上旬、10月中旬が平年並で、4月下旬、5月下旬、10月下旬は平年より低く、他の旬は全て平年より高かった。農耕期間である5～9月の日平均気温の積算値は3080℃であった(平年差+230℃、平年比108%)。

日照時間：4、5、10月は平年より少なく、6～9月は平年より多かった。5～9月の日照時間の積算は905時間であった(平年差+83時間、平年比110%)

季節表および農耕期間の平均気温、降水量、日照時間の積算値

項目 年次	前年		本年							
	初霜 (年月日)	根雪始 (年月日)	根雪終 (年月日)	積雪期間 (日)	降雪終 (年月日)	耕鋤始 (年月日)	晩霜 (年月日)	初霜 (年月日)	無霜期間 (日)	降雪始 (年月日)
本年	R6.10.21	R6.12.11	R7.3.1	81	R7.3.31	R7.4.09	R7.4.06	R7.10.25	202	R7.11.10
平年	10.23	12.14	3.7	84	4.16	4.08	4.26	10.23	179	11.11
比較	▲2	▲3	▲6	▲3	▲16	1	▲20	2	23	▲1

項目 期間		積算気温 (℃)	降水量 (mm)	日照時間 (時間)
5月上旬 ～ 9月下旬	本年	3080	732	905
	平年	2850	554	822
	比較	230	177	83
	(%)	108	132	110

項目 期間		積算気温 (℃)	降水量 (mm)	日照時間 (時間)
4月上旬 ～ 10月下旬	本年	3679	859	1150
	平年	3458	729	1176
	比較	221	130	▲26
	(%)	106	118	98

注1)農耕期間の積算値は北斗市のアメダス、耕鋤始は道南農試により、それ以外は函館地方気象台(函館市美原)の観測値である。初霜、晩霜は、函館地方気象台の気象データからの推定値である(最低気温が1.3℃以下、最低気温起時に雨天の場合は除く)

注2)平年値は前10か年の平均値である。ただし、晩霜については、令和元年(2019年)までは、函館地方気象台の観測値であり、令和2年(2020年)以降は推定値、初霜については、令和6年(2024年)までは、函館地方気象台の観測値であり、令和7年(2025年)は推定値である。

注3)表中▲は「早」または「少」を示す。

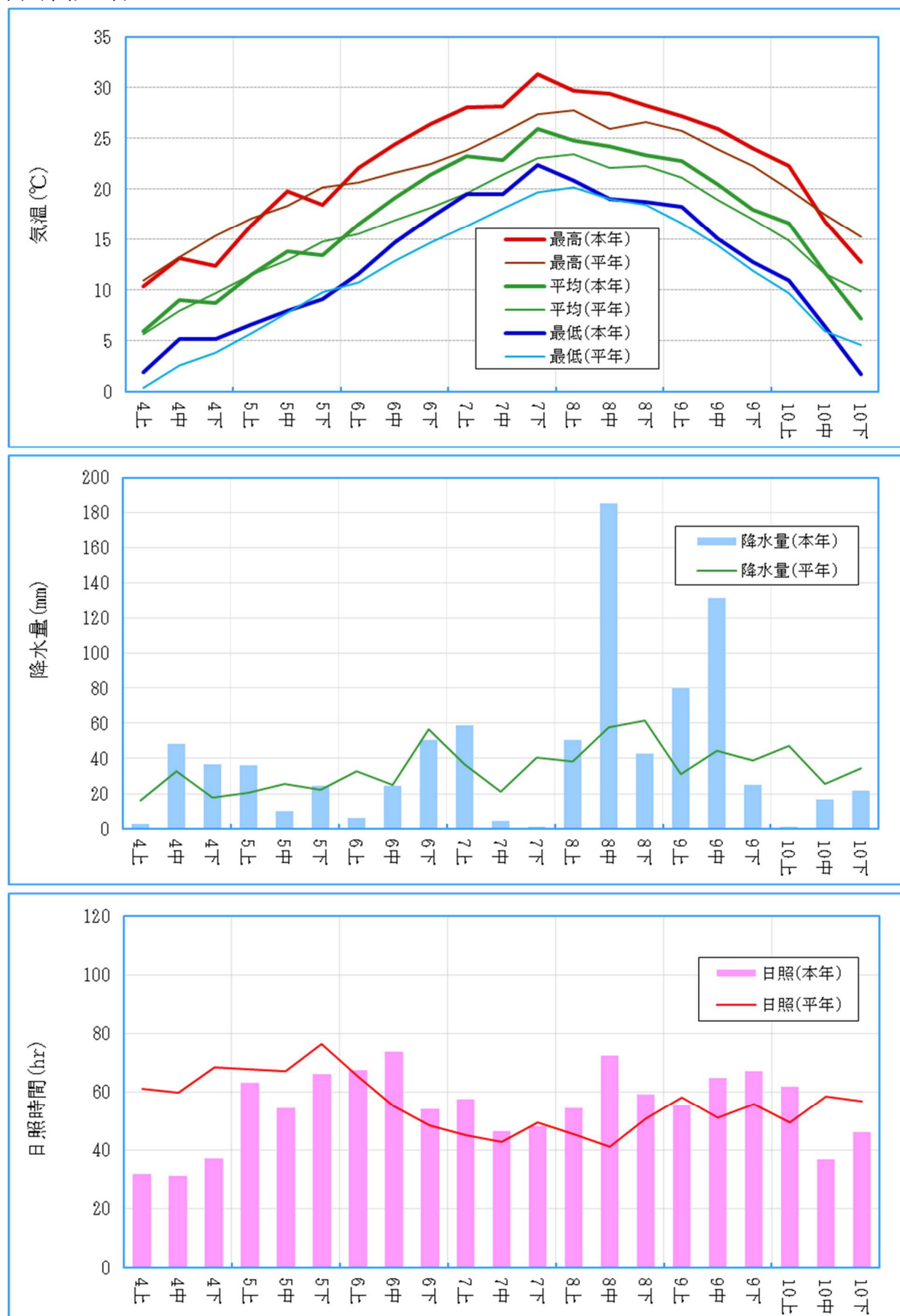
気象表（令和 7 年）

月	旬	平均気温(℃)			最高気温(℃)			最低気温(℃)			降水量(mm)				日照時間(hr)			
		本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	%	本年	平年	比較	%
4	上	6.0	5.7	0.3	10.4	11.0	▲ 0.6	1.9	0.4	1.5	3.0	16.1	▲ 13.1	19	31.8	61.1	▲ 29.3	52
	中	9.0	8.0	1.0	13.2	13.3	▲ 0.1	5.2	2.6	2.6	48.5	33.0	15.5	147	31.1	59.8	▲ 28.7	52
	下	8.7	9.7	▲ 1.0	12.4	15.4	▲ 3.0	5.2	3.8	1.4	36.5	18.0	18.5	203	37.2	68.6	▲ 31.4	54
5	上	11.5	11.5	0.0	16.4	17.1	▲ 0.7	6.6	5.8	0.8	36.0	20.8	15.2	173	63.1	67.9	▲ 4.8	93
	中	13.8	13.0	0.8	19.8	18.4	1.4	8.0	7.8	0.2	10.0	25.7	▲ 15.7	39	54.5	67.3	▲ 12.8	81
	下	13.5	14.8	▲ 1.3	18.5	20.2	▲ 1.7	9.1	9.8	▲ 0.7	24.5	22.4	2.1	109	66.3	76.6	▲ 10.3	87
6	上	16.5	15.6	0.9	22.1	20.7	1.4	11.6	10.8	0.8	6.0	33.0	▲ 27.0	18	67.6	65.5	2.1	103
	中	19.1	16.9	2.2	24.4	21.6	2.8	14.7	12.9	1.8	24.5	24.9	▲ 0.4	98	73.9	55.2	18.7	134
	下	21.4	18.2	3.2	26.4	22.5	3.9	17.2	14.7	2.5	50.5	56.8	▲ 6.3	89	54.1	48.5	5.6	112
7	上	23.3	19.6	3.7	28.1	23.8	4.3	19.5	16.3	3.2	59.0	36.8	22.2	160	57.5	45.2	12.3	127
	中	22.9	21.4	1.5	28.2	25.6	2.6	19.5	18.1	1.4	4.5	21.2	▲ 16.7	21	46.6	43.0	3.6	108
	下	26.0	23.1	2.9	31.3	27.4	3.9	22.4	19.7	2.7	1.0	40.6	▲ 39.6	2	48.3	49.4	▲ 1.1	98
8	上	24.8	23.5	1.3	29.7	27.8	1.9	20.9	20.2	0.7	50.5	38.6	11.9	131	54.4	45.7	8.7	119
	中	24.2	22.1	2.1	29.4	26.0	3.4	19.0	19.0	0.0	185.5	57.6	127.9	322	72.4	41.2	31.2	176
	下	23.4	22.3	1.1	28.3	26.6	1.7	18.7	18.5	0.2	43.0	61.4	▲ 18.4	70	59.1	51.0	8.1	116
9	上	22.8	21.1	1.7	27.2	25.8	1.4	18.3	16.6	1.7	80.0	31.1	48.9	257	55.4	58.2	▲ 2.8	95
	中	20.5	18.9	1.6	26.0	23.9	2.1	15.1	14.4	0.7	131.5	44.3	87.2	297	64.7	51.1	13.6	127
	下	18.0	17.0	1.0	24.0	22.3	1.7	12.8	11.9	0.9	25.0	39.1	▲ 14.1	64	67.0	55.8	11.2	120
10	上	16.6	14.9	1.7	22.3	20.0	2.3	11.0	9.7	1.3	1.0	47.2	▲ 46.2	2	61.9	49.7	12.2	125
	中	11.7	11.6	0.1	16.8	17.5	▲ 0.7	6.4	6.0	0.4	16.5	25.7	▲ 9.2	64	36.9	58.5	▲ 21.6	63
	下	7.2	9.9	▲ 2.7	12.8	15.3	▲ 2.5	1.7	4.6	▲ 2.9	21.5	34.3	▲ 12.8	63	46.3	56.8	▲ 10.5	82
4月		7.9	7.8	0.1	12.0	13.2	-1.2	4.1	2.3	1.8	88.0	67.1	20.9	131	100.1	189.5	▲ 89.4	53
5月		13.0	13.2	-0.2	18.2	18.6	-0.4	7.9	7.9	0.0	70.5	68.9	1.6	102	183.9	211.8	▲ 27.9	87
6月		19.0	16.9	2.1	24.3	21.6	2.7	14.5	12.8	1.7	81.0	114.7	▲ 33.7	71	195.6	169.2	26.4	116
7月		24.1	21.4	2.7	29.3	25.7	3.6	20.5	18.1	2.4	64.5	98.6	▲ 34.1	65	152.4	137.6	14.8	111
8月		24.1	22.6	1.5	29.1	26.8	2.3	19.5	19.2	0.3	279.0	157.6	121.4	177	185.9	137.9	48.0	135
9月		20.4	19.0	1.4	25.7	24.0	1.7	15.4	14.3	1.1	236.5	114.5	122.0	207	187.1	165.1	22.0	113
10月		11.7	12.1	-0.4	17.2	17.5	-0.3	6.2	6.7	-0.5	39.0	107.2	▲ 68.2	36	145.1	165.0	▲ 19.9	88

注 1) 観測値は北斗市のアメダスデータを使用、平年値は前 10 か年による。

注 2) 表中▲印は「低」または「少」を示す。

気象図（令和7年）



2. 当場作況

水 稲 不 良

播種は平年より1日遅い4月23日に行った。出芽までの日数は平年並で、出芽期は4月28日であった。育苗期間中、4月下旬はやや低温で寡照、5月上旬は平年並の気温で寡照、5月中旬はやや高温で寡照であり、全体として平年並の気温で寡照であった。

移植は平年並の5月20日に行った。移植時の苗の形質において、草丈は「ふっくりんこ」は平年より短く、「ななつぼし」は長かった。葉数は2品種ともに平年より多く、茎数は「ふっくりんこ」は多く、「ななつぼし」は少なかった。地上部乾物重は2品種ともに平年を上回った。苗の充実度を表す地上部乾物重/草丈の値も2品種ともに平年を上回っていた。

5月下旬は低温で寡照に推移し、苗の活着および生育は遅れ、強風による葉枯れが見られた。6月上旬～中旬は高温で多照に推移し、生育はやや回復した。6月20日時点では、草丈は「ふっくりんこ」でやや低く、「ななつぼし」は平年並であった。葉数は「ふっくりんこ」で平年よりやや少なく、「ななつぼし」は平年並であった。茎数は2品種ともに少なかった。6月下旬はかなり高温であったため、生育は進み、幼穂形成期は「ふっくりんこ」は平年より3日早く、「ななつぼし」は1日早かった。また幼穂形成期後も7月上旬、中旬ともにかなり高温であったため、生育はさらに進み、止葉期は「ふっくりんこ」「ななつぼし」とともに、平年より5日早かった。出穂期は「ふっくりんこ」は平年より9日早く、「ななつぼし」は8日早く、過去16年間で最も早い出穂期であった。止葉葉数は2品種ともに少なかった。稈長は平年より短く、穂長は平年より長く、穂数は2品種ともに平年の82%で少なかった。

7月下旬～8月下旬の1か月間は、高温に推移したため、登熟は早く進み、登熟日数は「ふっくりんこ」で平年より8日短く、「ななつぼし」で6日短かった。成熟期は「ふっくりんこ」で平年より17日、「ななつぼ

し」で13日早く、過去16年間で最も早い成熟期であった。

倒伏やなびきは見られなかった。2品種ともに穂数は少なく、一穂粒数も2品種ともにやや少なかったため、 m^2 当粒数はかなり少なかった。稔実歩合は2品種ともに平年よりやや高かったが、 m^2 当粒数がかなり少なかったため、 m^2 当稔実粒数は2品種ともに平年の80%とかなり少なかった。登熟歩合は平年より「ふっくりんこ」で3.2ポイント、「ななつぼし」で0.4ポイントそれぞれ高かった。

「ふっくりんこ」は、精玄米千粒重は平年より1.6g重く、屑米歩合は平年より2.2ポイント高く、精玄米重は51.9kg/aで平年に比べて91%と少なかった。「ななつぼし」は、精玄米千粒重は平年より1.1g重く、屑米歩合は平年より1.4ポイント低く、精玄米重は57.9kg/aで平年に比べて97%とやや少なかった。平年に対する精玄米重比の2品種平均値は94%であった。2品種ともに精玄米千粒重は平年より重かったが、 m^2 当稔実粒数が平年の80%と少なかったため、精玄米重が少なくなった。

なお、等級検査は2品種ともに1等で、平年より等級は高かった。

以上のことから、本年の作況は「不良」である。

生育及び収量調査成績(令和7年)

項目		品 種 名 / 年次	ふっくりんこ			ななつぼし		
			本年	平年	比較	本年	平年	比較
生育期節	播種期	(月日)	4.23	4.22	1	4.23	4.22	1
	出芽期	(月日)	4.28	4.27	1	4.28	4.27	1
	移植期	(月日)	5.20	5.20	0	5.20	5.20	0
	幼穂形成期	(月日)	6.27	6.30	▲ 3	6.25	6.26	▲ 1
	止葉期	(月日)	7.11	7.16	▲ 5	7.09	7.14	▲ 5
	出穂期	(月日)	7.16	7.25	▲ 9	7.15	7.23	▲ 8
	成熟期	(月日)	8.27	9.13	▲ 17	8.24	9.06	▲ 13
	穂揃日数	(日)	3	6	▲ 3	3	6	▲ 3
	登熟日数	(日)	42	50	▲ 8	40	46	▲ 6
	生育日数	(日)	126	144	▲ 18	123	137	▲ 14
移植時	草丈	(cm)	13.3	14.5	▲ 1.2	16.0	13.9	2.1
	葉数	(枚)	3.7	3.4	0.3	3.6	3.4	0.2
	茎数	(本/個体)	1.73	1.30	0.43	1.00	1.11	▲ 0.11
	地上部乾物重	(g/100本)	3.22	2.94	0.28	3.64	2.91	0.73
	地上部乾物重/草丈		0.24	0.20	0.04	0.23	0.21	0.02
本田生育	草丈	6月20日	32.8	34.4	▲ 1.6	35.8	35.1	0.7
	(cm)	7月20日	88.9	79.2	9.7	88.9	82.5	6.4
		8月20日	88.9	92.0	▲ 3.1	89.0	92.7	▲ 3.7
	葉数	6月20日	7.5	7.8	▲ 0.3	7.7	7.9	▲ 0.2
	(枚)	7月20日	9.9	10.5	▲ 0.6	10.0	10.5	▲ 0.6
		8月20日	9.9	10.6	▲ 0.7	10.0	10.6	▲ 0.7
	止葉葉数	(枚)	9.9	10.6	▲ 0.7	10.0	10.6	▲ 0.7
	茎数	6月20日	519	566	▲ 47	443	501	▲ 58
	(本/㎡)	7月20日	585	792	▲ 207	527	694	▲ 167
		8月20日	580	712	▲ 132	534	647	▲ 113
成熟期	稈長	(cm)	73.3	77.9	▲ 4.6	70.3	76.2	▲ 5.9
	穂長	(cm)	18.2	16.2	2.0	18.0	16.4	1.6
	穂数	(本/㎡)	580	707	▲ 127	529	643	▲ 114
収量構成要素	一穂粒数	(粒)	46.2	47.9	▲ 1.7	49.1	51.6	▲ 2.5
	㎡当粒数	(×1000)	26.8	33.9	▲ 7.1	26.0	33.2	▲ 7.2
	稈実歩合	(%)	94.9	93.7	1.2	96.6	94.3	2.3
	㎡当稈実粒数	(×1000)	25.4	31.8	▲ 6.4	25.1	31.3	▲ 6.2
	同上平年比		80	100	▲ 20	80	100	▲ 20
	登熟歩合	(%)	83.5	80.3	3.2	79.2	78.8	0.4
	粒摺歩合	(%)	69.2	73.9	▲ 4.7	75.8	76.7	▲ 0.9
	屑米重	(kg/a)	6.9	6.1	0.8	2.9	4.0	▲ 1.1
	屑米歩合	(%)	11.7	9.5	2.2	4.8	6.2	▲ 1.4
	精玄米千粒重	(g)	24.1	22.5	1.6	22.6	21.5	1.1
収量	わら重	(kg/a)	52.7	65.6	▲ 12.9	53.4	65.8	▲ 12.4
	精粒重	(kg/a)	75.0	77.6	▲ 2.6	76.4	77.9	▲ 1.5
	精玄米重	(kg/a)	51.9	57.3	▲ 5.4	57.9	59.7	▲ 1.8
	収量平年比	(%)	91	100	▲ 9	97	100	▲ 3
	玄米検査等級	(等)	1	2上	—	1	1下	—

注1) 平年値は前7年間の令和4年(2022年、最豊年)、平成30年(2018年、最凶年)を除く5年の平均値を用いた。

注2) 苗は中苗紙筒、栽植密度は25.3株/㎡ (33cm×12cm)、1株3本植え。

注3) 本田にはN、P₂O₅、K₂O成分をそれぞれ7.5、9.1、6.5(kg/10a)施用した。

注4) 篩目は1.90mmを使用し、精玄米重、千粒重とも水分15.0%に補正した。

注5) 登熟歩合は比重1.06の塩水で調査した。

注6) 比較の▲印は「減」または「早」を示す。

Ⅲ 試験研究及び地域支援活動の概要

1. 生産技術グループ

〔栽培環境関連〕

栽培環境試験では、経常（各部）研究「園芸作物および水稻における脱プラスチック肥効調節型肥料施用技術の開発」に取り組み、スイートコーン、ねぎ、キャベツに対するプラスチック被覆によらない各種肥効調節型肥料の肥効特性を明らかにし、農業試験会議（成績会議）で指導参考事項となった。受託研究「ピートモス施用によるハウス土壌の理化学的改善効果」では、ピートモス施用による土壌理化学的改善効果およびトマトに対する施用効果を検討した。

土壌調査関係では、経常研究「環境保全型有機質資源施用基準の設定調査（土壌機能実態モニタリング調査）」および受託（国庫）研究「農地土壌炭素貯留等基礎調査事業（農地管理実態調査、定点調査）」、「地力調査」において、せたな町および今金町の生産者ほ場 12 地点の土壌調査およびアンケート調査を実施した。道受託研究「農業農村整備事業等に係る土壌調査（経済効果検討調査）」では、ばれいしょと大豆の生育・収量に対する除稈施工の影響を調査した。

〔園芸関連〕

園芸試験では、経常研究「果実品質に優れた多収な春どりいちご品種の開発」において地域適応性検定を行った。経常研究「北海道のさつまいも栽培における電熱線を利用した地温管理による高増殖率育苗法の確立」において、ウィルスフリーである市販ポット苗を利用して高い増殖率を確保するための育苗試験を実施した。経常研究「高温対策としての秋植えカーネーションにおける春夏切り技術の開発」を開始し、LED の効果の検証および鮮度保持技術を検討した。経常研究「長期どり可能な春どりいちご系統の品種化」では有望系統について地域適応性検定試験を実施した。共同研究「アダプティブ MAP を用いた花きの高鮮度流通技術の開発」において適した資材の条件等の検討を行った。重点研究「持続可能な施設園芸のための環境制御技術の高度化」において、アルストロメリアに対する環境制御技術の効果を検討し、農業試験会議（成績会議）で普及推進事項となった。

〔地域支援関連〕

革新的技術導入による地域支援では施設園芸における統合環境制御盤の導入による低コスト・省力化技術

の実証を行い、花き生産者における環境制御機器の利用実態の把握と統合環境制御盤の導入効果を示した。結果は渡島地域農業技術支援会議地域関係者会議において情報提供した。

2. 作物病虫グループ

〔作物関連〕

水稻の地域適応性検定試験（優決基本相当）では、市販用の「上育 485 号」（「ふっくりんこ」「ななつぼし」対照）は収量やいもち病抵抗性、タンパク質含有率、炊飯米外観など優点があることから、単年評価は「優る」、有望度は「有望」とした。「上育 489 号」（「ふっくりんこ」「きたくりん」対照）は収量や食味など複数の優点があることから、単年評価は「優る」、有望度は先行系統「上育 485 号」と比べ、収量性が劣ることを加味し「やや有望」とした。糯米「上育糯 490 号」（「きたふくもち」対照）は、収量、いもち抵抗性、食味などに優れるため、単年評価は「やや有望」、有望度は複数年の収量性で見ると対照品種並であったことから「並」とした。直播用の「空育 198 号」（「えみまる」「大地の星」対照）は、本年は「えみまる」に対しては、収量や割粳、炊飯米外観に優れるが、低温苗立性は劣ることから単年評価は「やや優る」、大地の星に対しては、炊飯米外観や食味に優れる一方、穂ばらみ期耐冷性に劣ることから「並」とした。有望度は複数年の収量性や耐倒伏性、炊飯米外観や食味に優れることを考慮し、有望度は「有望」とした。醸造用（「吟風」標準）の「空育酒 200 号」（北沢）は収量やタンパク質含有率に優る一方、耐倒伏性が劣っていた。そのことを加味し、単年評価は「やや優る」、有望度は累年の耐倒伏性や等級検査が悪いことから「やや劣る」とした。

新資材の実用化試験では、水稻除草剤 6 剤の試験を実施した。本年度は 2 剤が指導参考事項となり、うち道南農試供試は 1 剤であった。

畑作物の地域適応性検定試験（優決基本相当）は、ダイズシストセンチュウレース 3 抵抗性を持つ黒大豆「十育 281 号」（「いわいくろ」対照）を供試した。「十育 281 号」は多収でダイズシストセンチュウ抵抗性も有していることから単年評価、有望度とも「やや有望」。小豆は、コンバイン収穫適性が期待できる中生普通小豆「十育 187 号」「十育 189 号」（「きたひまり」「エリモ 167」対照）と大納言小豆「十育 188 号」

（「とよみ大納言」「ほまれ大納言」対照）を供試した。「十育 187 号」「十育 189 号」とも多収で粒大が大きく検査等級も対照より良かったため、単年評価は共に「やや優る」としたが、10cm 以内莢率の優位性が認められなかったため、「十育 187 号」の有望度は「並」、百粒重がやや大きかった「十育 189 号」は「やや優る」とした。「十育 188 号」はやや多収でつる化程度も小さかったため、単年評価は「やや優る」としたが、有望度は「再検討」。

〔病虫関連〕

クリーン農業・有機農業に関する課題として経常（各部）研究「有機栽培を志向する醸造用ぶどうにおける重要害虫に対する被害抑制技術の開発」、「ジャガイモ疫病薬剤散布開始指示システムの現地実証と改良」、公募型（その他）「北海道の小豆におけるマメノメイガ緊急防除対策」を実施した。

農作物病虫害診断試験では合計 26 件の診断依頼があった。

病虫害発生予察事業では農試定点ほにおける各作物（水稻、ばれいしょ、キャベツ）の主要病虫害（斑点米カメムシ、コナガ、いもち病等）の発生状況を調査し、結果を病虫害発生予察情報として提供した。

新農業資材試験では殺虫剤 3 剤、殺菌剤 5 剤の効果試験を実施し、殺虫剤 2 剤が指導参考事項となった。

IV 試験研究及び地域支援活動の課題名

1. 生産技術グループ

〔栽培環境関連〕

1) ピートモス施用によるハウス土壌の理化学性改善効果 (令和 6～8 年、受託（民間）)

目 的：ピートモス施用による土壌理化学性改善効果を明らかにするとともに、トマトに対する施用効果を検討する。

2) 環境保全型有機質資源施用基準の設定調査

①土壌機能実態モニタリング調査

(平成 11 年～継続、經常、中央・上川・十勝・釧路・北見と分担)

目 的：北海道の耕地土壌の理化学性の実態、変化の方向および土壌管理のための留意点を明らかにし、適正な管理および土壌肥沃度の維持に役立てる。

3) 農作物の病害虫診断試験

①生理障害診断 (昭和 50 年～継続、經常)

目 的：農業改良普及センター、技術普及室などを通して依頼される農作物の生理障害などを迅速に診断し、適切な指示を行うことによって被害を最小限にとどめる。

4) 園芸作物および水稲における脱プラスチック肥効調節型肥料施用技術の開発

(令和 5～7 年、經常（各部）、中央と共同)

目 的：園芸作物および水稲において、被覆肥料に頼らないクリーン農業を推進するため、肥効調節型肥料等の代替資材を用いた省力・安定生産を可能とする施肥技術を開発する。

5) 道営農業農村整備事業等に係る土壌調査

(昭和 40 年～継続、道受託、中央・上川・十勝・釧路・北見・花野と分担)

目 的：道営農業農村整備事業における水田、畑地の土地改良事業の計画地区での適正な土地改良方策を実施するための指針を示す。また、事業実施後の作物増収効果を明らかにする。

6) 農地土壌炭素貯留等基礎調査事業（農地管理実態調査） (令和 6～8 年、国庫受託、中央・上川・

十勝・釧路・北見と分担)

目 的：全国の農耕地における土壌炭素の貯留量と営農管理による変動を明らかにする一環として、北海道の農耕地で調査を行う。

〔園芸関連〕

7) 高温対策としての秋植えカーネーションにおける春夏切り技術の開発

(令和 7～9 年、經常（各部）)

目 的：秋植えカーネーションにおいて、LED 電照による生育前進技術を開発する。また、鮮度保持技術を活用し、高単価である母の日需要に合わせて安定出荷する技術を開発する。

8) アダプティブ MAP システムを用いた花きの高鮮度流通技術の開発

(令和 7～9 年、共同、三菱瓦斯化学株式会社と共同)

目 的：道産花きの主要品目であるカーネーションにおいて、AMS を活用した鮮度保持効果、利用条件および導入効果を明らかにする。

9) 北海道のさつまいも栽培における電熱線を利用した地温管理による高増殖率育苗法の確立

(令和 6～8 年、經常)

目 的：ポット苗および種芋を用いて電熱線を利用した地温管理により、ウィルスフリー切苗直接定植より種苗コストを約 60～80%削減可能とする増殖法を開発する。

10) 長期どり可能な春どりいちご系統の品種化

(令和 6～8 年、經常、花野・上川と共同)

目 的：これまでに育成した有望系統を活用し、長期どりが可能な春どり栽培向けいちご多収品種を開発する。

〔地域支援関連〕

11) 革新的技術導入による地域支援

(1) 施設園芸における統合環境制御盤の導入促進

(令和 6～7 年、經常（各部）)

目 的：七飯町の花き生産者において、光合成促進（炭酸ガス発生）装置、自動換気システム（側窓開閉装置）等の使用実態とその効果を評価し、統合環境制御盤の導入を促進する。

12) 普及センターの支援要請に対する対応

(1) 水田フル活用における土壌物理性改善技術の確立に向けた調査と結果解析の支援（継続）

支援要請取り下げ(4/21)

(2) 管内水稻部会 部会研修に係る支援（継続）

- a 担当：研究部長 五十嵐俊成
- b 対象：渡島農業改良普及センター地域第2係
- c 内容：厚沢部町・今金町の優決ほ等を視察、低収要因の解析結果に係る助言、水稻直播栽培に係る打ち合わせ、低収要因の解析結果に係る助言と次年度支援要請化に向けた提案

(3) 管内畑作部会の部会研修に係る支援（新規）

- a 担当：作物病虫G 鴻坂扶美子・青木元彦
- b 対象：渡島農業改良普及センター
- c 内容：大豆現地ほ場でのホソヘリカメムシ、小豆ほ場でのマメノメイガ発生調査(森町・北斗市)、注意を要する病害虫の実態把握、ホソヘリカメムシに係る防除打ち合わせ

(4) 管内園芸部会の部会研修に係る支援（新規）

- a 担当：作物病虫G 三澤知央
- b 対象：渡島農業改良普及センター地域第2係
- c 内容：低濃度エタノール土壌還元消毒法に係る講義、管内ニラ・アスパラガス現地ほ場視察、トルコギキョウ低濃度エタノール土壌還元消毒法に係る打ち合わせ

(5) 管内畜産部会の部会研修に係る支援（新規）

- a 担当：生産技術G 内藤 学
- b 対象：渡島農業改良普及センター北部支所
- c 内容：ソルゴー等の活用事例について（硝酸態窒素の測定方法について情報提供）、黒毛和種DNAマーカー育種に係る講義

(6) 良食味米安定生産に向けた土壌窒素分析支援および水稻栽培技術等への情報提供（継続）

- a 担当：生産技術G 櫻井道彦・溝手桃花
- b 対象：渡島農業改良普及センター水稻担当者
- c 内容：水田土壌の窒素分析支援、結果の取りまとめに対する助言、「米づくり資料」（北海道農産協会）への掲載について協議

(7) ばれいしょおよび輪作作物の安定生産に係る支援（新規）

- a 担当：生産技術G 櫻井道彦・内藤 学・溝手桃花
- b 対象：渡島農業改良普及センター地域第2係
- c 内容：ばれいしょほ場土壌診断に係る支援、土壌分析値に基づく土壌改良・施肥設計と改善に向け

た助言指導

(8) 小豆のマメノメイガ被害軽減対策

- a 担当：作物病虫G 青木元彦
- b 対象：檜山農業改良普及センター
- c 内容：現地ほ場の被害状況確認、マメノメイガの防除時期、薬剤に関する情報提供、防除指導上の問題点作成に係る助言、次年度の防除対策への助言

(9) 管内園芸部会の調査研究に係る支援（継続）

- a 担当：作物病虫G 三澤知央
- b 対象：檜山農業改良普及センター
- c 内容：ブロッコリー黒すす病薬剤防除試験計画および調査方法について助言、黒すす病防除試験ほ状況確認、病斑の見分け方、調査内容の整理と黒すす病防除対策協議、R7 試験成績検討

(10) 醸造用ぶどう欧州種における晩腐病等防除対策への支援

- a 担当：作物病虫G 池田幸子
- b 対象：檜山農業改良普及センター
- c 内容：奥尻ワイナリーほ場の晩腐病について、現地支援要請実施、防除歴作成に関する助言

(11) 潮トマト栽培における障害果低減、正品（糖度8以上）増収技術確立支援（継続）

- a 担当：生産技術G 内藤 学
- b 対象：檜山農業改良普及センター檜山北部支所
- c 内容：現地生産者栽培管理調査、JA 新はこだて若松トマト集荷場視察、せたな町農業センター栽培支援、革新課題化に向けた打ち合わせ

13) 地域農業技術センター連絡会議に対する支援

目的：道南地域における農業生産の振興を図るため、檜山管内の町立農業技術センターの実務者を中心とした農業関連技術の情報交換を支援する。

道南 NATEC 総会

日時：令和7年5月8日

場所：厚沢部町農業活性化センター

内容：令和6年度活動報告、令和7年度役員体制、令和7年度活動計画、各機関における研究課題など

道南 NATEC 秋季研修会

日時：令和7年10月2-3日

場所：恵庭市・長沼町

内容：道央農業振興公社、ホクレン長沼研究農場農場見学

道南 NATEC 役員会

日時：令和8年3月26日

令和 7 年度活動報告、令和 8 年度役員（案）、令和 8 年度活動について

2. 作物病虫グループ

〔水稻新品種育成試験関連〕

1) 「日本一の米どころ北海道」の実現へ向けた水稻新品種の開発促進

（令和 7～11 年、経常、中央・上川と共同）

ア 世代促進

目 的：水稻品種開発において、用途に応じた品種を迅速に提供するため、品種育成期間を短縮させる。

イ 地域適応性試験

（系統適応性検定・優良品種決定基本調査）

目 的：水稻品種開発において、品種を迅速に提供するため、育成系統の地域適応性を評価する。

2) 気候変動への対応と環境負荷軽減を実現する北海道向け高品質極良食味米品種の開発

(3) 道南地域における適応性評価と有望系統の現地実証試験

（令和 7～9 年、公募(国費)、上川・中央と共同）

目 的：上川農試育成の中晩生系統の生産力試験を行い、道南における適応性を評価する。現地圃場で有望系統の試作を実施、適応性と普及性を明らかにする。

3) 優決（水稻）（水稻優良品種決定現地調査）

（昭和 29 年～継続、経常（各部））

目 的：有望品種・系統の道南現地における適応性を明らかにし、優良品種決定の資とする。

4) 水稻新品種普及促進事業

（昭和 41 年～継続、経常（各部））

目 的：新品種の普及を促進するため、優良品種候補の有望系統について、種子の増殖を行う。

〔畑作物の地域適応性検定試験関連〕

5) 大豆優決基本相当 （平成 13 年～継続、経常）

目 的：試験機関で育成した有望系統について、その生産力並びに主要特性を検定し、優良品種決定の資とする。

6) 小豆優決基本相当 （平成 13 年～継続、経常）

目 的：試験機関で育成した有望系統について、その生産力並びに主要特性を検定し、優良品種決定の資と

する。

7) 優決（大豆） （昭和 29 年～継続、経常（各部））

目 的：有望系統の道南現地における適応性を明らかにし、優良品種決定の資とする。

8) 優決（小豆） （昭和 46 年～継続、経常（各部））

目 的：有望系統の道南現地における適応性を明らかにし、優良品種決定の資とする。

9) 気候変動に対応する北海道向け多収大豆品種の開発（系適相当）

(1) 耐湿性に優れる多収中生品種の開発

（令和 7～9 年、公募(国費)、十勝・中央と共同）

目 的：十勝農試育成の中生白目大豆系統（十系）について、道南地方における収量・品質を評価する。

10) ゲノミック選抜を活用した新たな多収大豆品種開発手法

(2) 収量性の交配シミュレーションの実証とアプリケーションの開発

（令和 7～9 年、重点、十勝・中央・上川・北見と共同）

目 的：交配シミュレーションを用いて予測した上位交配組合せの養成のため、1 集団について、道南農試の温室等で 2 世代/年の世代促進を行う。

11) 新農業資材の実用化試験

(1) 水田除草剤実用化試験

（昭和 34 年～継続、民間受託）

目 的：新除草剤による除草効果及び水稻の生育収量に及ぼす影響について検討し、今後の除草体系確立の資とする。

〔病虫関連〕

12) 農作物病虫害生理障害診断・緊急対策試験

(1) 病虫害および生理障害の診断

(2) 突発病虫害の緊急対策試験

（令和 7～11 年 経常、生産技術グループと共同）

目 的：突発的に発生する病虫害や生理障害の診断、病虫害の薬剤抵抗性遺伝子有無確認を迅速かつ正確に行う。これに加えて、重要な突発病虫害に対しては緊急の対策試験を実施し、生産現場に対して対応策を速やかに提供する。

13) 有機栽培を志向する醸造用ぶどうにおける重要

害虫に対する被害抑制技術の開発

(令和 6～9 年、経常(各部)、中央農試と共同)

目的：有機栽培を志向する醸造用ぶどう園で防除が困難となっている害虫種の発生生態および収量等への影響を解明するとともに、できるだけ化学合成農薬に頼らない被害抑制技術を開発する。

14) ジャガイモ疫病薬剤散布開始指示システムの現地実証と改良

(令和 7～9 年、経常(各部))

目的：ジャガイモの重要病害である疫病を適切に薬剤防除するため、気象データから散布開始時期を指示するアルゴリズムを開発した。このアルゴリズムについての実証試験を行う。

15) 北海道の小豆におけるマメノメイガ緊急防除対策

(令和 6～7 年、公募(その他)、中央農試、北見農試と共同)

目的：小豆のマメノメイガについて、発生生態を明らかにするとともに、無処理と比較して被害率が 7 割減になるような薬剤防除法を確立する。

16) 病害虫発生予察調査

(1) 水稻病害虫発生予察定点調査

(2) 畑作病害虫発生予察定点調査

(3) 園芸作物病害虫発生予察定点調査

(昭和 19 年～継続、道受託)

目的：植物防疫法に基づいて病害虫の発生予察法の確立を図るとともに、病害虫防除所と連携して発生予察情報を関係機関に提供して病害虫防除の適正化を図る。

17) 新農業資材の実用化試験

(昭和 45 年～継続、民間受託)

目的：新殺菌剤および殺虫剤の病害虫に対する防除効果および薬害を検討する。

3. 地域農業技術支援会議の活動

1) 設置趣旨

農政の大きな転換と農業・農村に対するニーズの多様化が進み、農業政策も地域の自主性や創意工夫を重視する方向へと変化し、地域課題も一層高度化・多様化している。このような中で、渡島総合振興局及び檜

山振興局管内の農業及び農業関連産業が直面する課題に試験研究と普及組織、振興局行政が迅速かつ確に対応するため、地域農業を支援する推進体制として、「渡島地域農業技術支援会議」並びに「檜山地域農業技術支援会議」を設置している。

2) 渡島地域農業技術支援会議

(1) 代表者会議

①日時：令和 7 年 6 月 27 日、令和 8 年 1 月 27 日

②場所：渡島農業改良普及センター

③参集：総合振興局、農業改良普及センター、ホクレン函館支所

④内容：事務局会議等の年間スケジュールおよび実施状況報告、プロジェクト課題『スプレーカーネーションにおける「葉先枯れ」対策技術の確立』の進捗状況と取りまとめ状況、要望課題に係る取組実績、取組計画、把握方法、対応状況、次年度要望課題に対する対応方針、等。

(2) 地域関係者会議

①日時：令和 8 年 2 月 27 日

②場所：渡島農業改良普及センター

③参集：総合振興局、農業改良普及センター、管内市町、J A、ホクレン函館支所、指導農業者

④内容：令和 7 年度渡島地域農業技術支援会議の実施状況について、令和 7 年度支援要望課題『スプレーカーネーションにおける「葉先枯れ」対策技術の確立』の取組結果について、令和 8 年度要望課題調査結果に対する対応方針について、情報提供「花き生産における統合環境制御盤の導入促進」(道南農業試験場)

(3) 事務局会議およびプロジェクト課題活動等

事務局会議：3 回(5/9, 9/17, 12/23)、プロジェクト課題：調査 9 回・打ち合わせ 1 回。

(4) 渡島農業関係業務連携会議

①日時：令和 7 年 6 月 27 日

②場所：渡島農業改良普及センター

③参集：総合振興局、農業改良普及センター、ホクレン函館支所

④内容：普及活動計画と調査研究課題について、道南農業試験場の研究課題について、技術普及室からの情報提供について、渡島総合振興局の農業関連施策について、ホクレンからの情報提供について

3) 檜山地域農業技術支援会議

(1) 代表者会議

- ①日時：令和 7 年 6 月 2 日、令和 8 年 2 月 9 日
- ②場所：檜山農業改良普及センター
- ③参集：振興局、農業改良普及センター、ホクレン函館支所
- ④内容：事務局会議等の年間スケジュールおよび活動報告、次年度要望課題への対応方針、要望課題の把握方法、要望課題の対応状況等。

(2) 地域関係者会議

- ①日時：令和 8 年 3 月 16 日
- ②場所：檜山農業改良普及センター
- ③参集：振興局、農業改良普及センター、管内町、JA、農業士、ホクレン函館支所
- ④内容：令和 7 年度檜山地域農業技術支援会議の活動状況について、令和 8 年度要望課題に対する対応方針について、令和 7 年度聞き取り調査で収集した事項の対応方針について令和 6 年度聞き取り調査で収集した事項の対応状況について

(3) 事務局会議およびプロジェクト課題活動等

事務局会議：3 回（5/9, 10/31, 12/15）、要望課題掘り起こし：1 回（9/18）。

(4) 檜山農業関係業務連携会議

- ①日時：令和 7 年 6 月 2 日
- ②場所：檜山農業改良普及センター
- ③参集：振興局、農業改良普及センター、ホクレン函館支所
- ④内容：普及センター活動計画について、道南農業試験所の研究課題について、技術普及室からの情報提供について、ホクレンからの情報提供について、檜山振興局の情報提供について

V 試験研究成果の公表

1. 技術普及に移された成果

令和 7 年度北海道農業試験会議(成績会議)において、当年度とりまとめた試験成績について、普及、研究、行政に提供される事項が決定された。そのうち、当場が担当または分担した提出課題は次のとおりである。

1) 普及奨励事項

水稻新品種候補「空育 198 号」

2) 普及推進事項

アルストロメリア春植え加温周年切り作型における環境制御技術

長日処理により採花本数は 17～38%増加した。保温強化ハウスにおける変温管理と CO₂ 施用による環境制御で採花本数は 19～22%増加し、燃料消費量は 20%減少した。長日処理、環境制御およびその組み合わせの効果には品種間差があり、「ミストラル」では 3 年間で最大 795 万円/10a の利益増加が見込まれた。

3) 指導参考事項

(1) 露地野菜に対するプラスチックを用いない肥効調

節型肥料の施用効果

全窒素施肥量のうち、キャベツは UF3 を 20 または 40%、スイートコーンは UF3 または GIB を 20%、ねぎは HCDU 中を 40%、にんじんは UF2 または HCDU 短を 30%配合することで、省力的かつ安定した窒素供給ができ、全量速効性肥料またはプラスチック被覆肥料を用いた施肥体系と同等以上の収量性となる。

(2) 令和 7 年度の発生にかんがみ注意すべき病害虫

令和 7 年度に実施した病害虫発生予察調査から、多発傾向にあった病害虫として 13 病害虫を示した。また、令和 8 年度に特に注意を要する病害虫として 4 病害虫について防除指導上の注意を喚起する。さらに、令和 7 年度に新たに発生を認めた病害虫として 18 病害虫（病害 5、害虫 13）を示した。

(3) 新農業資材

道南農試で試験を実施した水稻除草剤 5 剤、殺虫剤 2 剤を指導参考事項とした（薬剤名省略）。

4) 研究参考事項

該当無し

2. 論文、資料および刊行物

1) 研究論文

論文名	学会誌名	巻号数	ページ	著者名
2023 年 5 月に北海道奥尻島でブドウ葉に発生した晩腐病について	北日本病害虫研究会報	76	80-85	三澤知央（道南作病）、黒川晃次（農研本部）
Stem and root rot of <i>Atractylodes lancea</i> caused by <i>Rhizoctonia</i> spp., including a new subgroup of AG-6 (AG-6 Gv5) and virulence of Japanese AG-6 isolates	J Gen Plant Pathol	92	32-42	森万菜実（北見生技）、野津あゆみ（中央予察）、佐藤豊三（薬用植物資源研究センター）、藤原直樹（夕張ツムラ）、三澤知央（道南作病）
Identification of Adzuki Bean Quantitative Trait Loci Associated With Resistance to Soybean Cyst Nematode	Legume Science	7:e70052	1-9	相馬ちひろ（中央生工）、東岱孝司（十勝生技）、鴻坂扶美子（道南作病）、長澤秀高（十勝豆類）、小倉玲奈（北見生技）、鈴木幸子（北見農試）
北海道の水稻品種における挫折強度と初期生育の関係	令和7年度日本育種学会・日本作物学会北海道談話会	66	14-15	丸田泰史（道南作病）

2) 口頭発表

発表名	発表学会等名	開催地	開催時期	発表者名(所属)
畑作物に対するメタン発酵消化液のリン酸の肥効	日 本 土 壤 肥 料 学 会 2025 年度新潟大会	新潟市	9/17-19	石倉 究(十勝農試)、坂本 樹一朗(十勝農試)、櫻井 道彦、池本 秀樹(十勝農試)、中村 真人(農研機構農村工学研究部門)
子実用トウモロコシの有機栽培における安定生産技術と輪作体系への導入効果	第 260 回日本作物学会講演会	新潟市	9/21-22	小谷野 茂和(中央農試)、櫻井 道彦、古林 直太(中央農試)、杉川 陽一(中央農試)、福川 英司(中央農試)、大橋 優二(中央農試)
メタン発酵消化液の施用位置が畑作物の窒素およびリン酸の肥効に与える影響	2025 年度(第 74 回) 農業農村工学会大会講演会	宇都宮市	9/2-5	石倉 究(十勝農試)、櫻井 道彦、坂本 樹一朗(十勝農試)、池本 秀樹(十勝農試)、中村 真人(農研機構農村工学研究部門)
猛暑年に対応する米のアミロース含量測定 NIRS 検量線の開発と精度	第 41 回近赤外フォーラム	東京都	11/12-14	川村周三(北海道農業施設協議会)、石津裕之(静岡製機)、飯野遥香(ホクレン)、五十嵐俊成(道南農試)
気象情報を用いた水稻「ゆめぴりか」のタンパク区分に基づく基準品率の早期予測技術	日本水稻品質・食味研究会	名古屋市	11/20-21	巽和也(中央水田)・五十嵐俊成(道南農試)・小杉重順(中央環境)・根本学(北農研)
北海道の水稻品種における挫折強度と初期生育の関係	令和 7 年度日本育種学会・日本作物学会北海道談話会	WEB	12/6	丸田泰史(道南作病)
北海道における秋まき小麦の赤さび病発生を促進する気象要因：統計的解析と実験的検証	令和 8 年度日本植物病理学会大会	大阪府枚方市	3/26-28	池田幸子(道南農試)
<i>Rhizoctonia solani</i> AG-2-2 IV によるセンキュウ立枯病(新称)	令和 8 年度日本植物病理学会大会	大阪府枚方市	3/26-28	森万菜実(北見生技)、野津あゆみ(中央予察) 三澤知央(道南作病)

3) 専門雑誌、著書・資料

①研究報告書 該当なし

②雑誌

公表成果名	雑誌名	号数	ページ	著者名(所属)
カーネーション最需要期での出荷を目指して	アグリポート	8-9 月号	13-41	菅原魁人(道南技術)
アルストロメリア春植え加温周年切り作型における環境制御技術	ニューカントリー	4 月号		菅原魁人(道南技術)

③書籍

書籍名	担当	出版社	ページ	著者名(所属)
北海道病害虫防除提要（第8版）	病害総括	北海道植物防疫協会	1－943	三澤知央（道南作病）
北海道病害虫防除提要（第8版）	水稻害虫編集委員	北海道植物防疫協会	1－943	青木元彦（道南作病）
北海道病害虫防除提要（第8版）	コムギ・ジャガイモ・タマネギ・ニラ・ニンジン・ナタネ病害執筆	北海道植物防疫協会	1－943	池田幸子（道南作病）

④新聞

公表・成果名	新聞名	発行日
タマフクラの生みの親 鴻坂さん道南農試に赴任	函館新聞	2025/5/3
道南農試の温室でコメ品種改良 82 種収穫	北海道新聞	2025/7/29
道南農試で真夏の稲刈り 品種育成より速く	函館新聞	2025/7/24
世代促進温室で水稻収穫～道南農試 2 期目の種子確保～	日本農業新聞	2025/7/30
真夏に水稻播種 2 期目を丁寧に	日本農業新聞	2025/8/18
道南農試・五十嵐部長、日本 DX 大賞で入賞	北海道新聞	2025/8/27
農作物の病気 研究員が解説 札幌で来月セミナー	北海道新聞	2025/10/29
リゾクトニア菌の新グループ発見	函館新聞	2026/1/20
植物の病害研究する道南農試研究主幹 三澤知央さん	北海道新聞	2026/2/7
道総研 3 農試 水田で猛暑の影響 公表データから判明	日本農業新聞	2026/2/12
植物病理学分かりやすく YouTube「道総研チャンネル」 道南農試・三澤さん初登場	函館新聞	2026/2/21

4) 印刷刊行物

(1) 令和 6 年度 北海道立総合研究機構道南農業試験場年報（令和 7 年 6 月、29 頁、HP 公開）

VI 研修及び技術支援

1. 研修の受け入れ

該当無し

2. 技術支援

1) 技術相談

項 目	件 数
電話・メール・来場によるもの	64件
	内訳 電話32件、メール16件、来場12件、現地4件
病害虫診断・生理障害診断(分析等)に基づくもの	36件
	内訳 ・診断別：病害12件、虫害12件、生理障害1件、その他5件 不明6件 ・作目別：野菜18件、花き0件、果樹4件、畑作6件、稲作7件、 芝1件

2) 技術指導

名 称	相手方	月 日
山ごぼうの種子の入手	植調	4月2日
2023年のトマトキバガのフェロモントラップについて	農研機構植物防疫研究部門	4月4日
麦の細麦について	(株)クボタ	4月14日
栗・プルーンの害虫防除について	七飯町一般	4月14日
イネ紋枯病に対する茎葉散布剤の効果	ホクレン函館支所	4月18日
イネ紋枯病に対する茎葉散布剤の効果	ホクレン函館支所	4月21日
大豆の裂皮と品種・栽培条件に関する質問	桧山北部農業改良普及センター	4月21日
黄色粘着板についたハエについて	渡島農業改良普及センター 一渡島北部支所	5月1日
リンゴの防除歴について	高瀬環境緑化株式会社	5月2日
ヘーゼルナッツの栽培について	不明	5月2日
水稻育苗培土に発生した白かびについて	ホクレン函館支所	5月15日
庭先果樹（プルーン、プラム、ぶどう）の栽培管理について（施肥・防除）	村本氏	5月16日
コナガの発生状況について	生産者	5月20日
さつまいも切り苗の自家増殖について	不明	6月2日
醸造用ぶどうについて「2年前から苗を定植、秋頃に葉が赤くなった。ウイルス病がどうか不安なのでみてほしい。」	北斗市生産者	6月5日
アワノメイガのフェロモントラップに誘殺された個体の確認と薬剤防除時期について	JA そらち南	6月10日
借地（農地・無作付状態）に繁茂するオオツメクサ対策について。 なお、長期にわたり無作付状態であるため、雑草が繁茂している。 時折、管理機や人力で物理的に除草しているが、とても大変。	不明	6月17日

名 称	相手方	月 日
土の中にいる虫が水稻に悪影響を及ぼさないか？	生産者	6 月 20 日
宮城県のタマネギで葉枯病が多発、こんなに多発するのか？	法政大学	6 月 23 日
傾斜地の中腹で小麦褐色雪腐病が発生。滞水しない斜面でも発生するのか？	檜山農業改良普及センター 檜山北部支所	6 月 24 日
イネ株内の葉身に白化症状が見られ、ほ場内に複数見られる。	中塚秀樹氏	6 月 26 日
八雲全域で発生で水稻下位葉に枯れが発生。	檜山農業改良普及センター 檜山北部支所	7 月 2 日
トマトの果実が真っ赤に熟しているが、切ると切断面に白い線が見える。先月までこんなことはなく、今月に入って見える。味もトマトの味がしない。 3 月末に定植（どうやら自分で栽培ではなく、農家からいただいている）。	北斗市市民	7 月 7 日
合成ピレスロイド剤のカメムシ類に対する殺卵効果	渡島農業改良普及センター	7 月 11 日
香川県で発生した SDHI 剤耐性ブロッコリー黒すす病菌について	檜山農業改良普及センター	7 月 16 日
アスパラガスの曲がり茎の発生について	生産者	7 月 22 日
米びつ内に発生した害虫について。	不明	7 月 22 日
鳥害防止対策ですいか果実上にプラスチックコンテナを被せたが、すいかの生育が悪くなったことについて	不明	7 月 24 日
大豆上位葉および葉柄の褐変・枯死症状について（現物持参）。函館市桔梗の水田転作ほ場に大豆を作付け。ほ場全面に症状があること。成長点付近を中心に症状が見られる。	生産者	7 月 25 日
最近、大沼からの用水に藻が多く流れてきている。田んぼの水口が詰まって困っている。この藻は何か？ 普及センターに行ったら「土地改良区」へと言われ、土地改良区へ行ったら「試験場へ」と言われて農試にきた。	不明	7 月 25 日
「外皮の緑化」と「にんにく可食部の黄化」について、花野菜技術普及室にも情報提供をお願いしたが、道南技術普及室にも情報提供をお願いしたい。	空知農業改良普及センター 空知南西部支所	7 月 28 日
北斗市のパークゴルフ場の芝を管理している。4 月頃からスポット状に枯れる。原因は何か？枯れた芝のサンプルもある。	有限会社 緑化園	7 月 28 日
厚沢部で発生したブロッコリー葉の生育異常について、病害か？（写真 4 枚添付）	サンアグロ	8 月 13 日
いちごを植えたほ場全体の生育が悪いことについて。	北斗市一般	8 月 19 日
低濃度エタノール土壤還元消毒を実施したメロンほ場での二価マンガニオン濃度が消毒後も低下しない事例はあるか？100ppm より下がらず、メロンを植えてもマンガン過剰障害が現れてしまう事態となっている（低エタ消毒処理後数年経過しているにもかかわらず）。土壤透排水性は並で、土壌 pH は 6.5、牛糞たい肥を施用している程度の条件である。	熊本県北広域本部鹿本 地域振興局 農林部農業 普及・振興課地域農業支 援班	8 月 25 日
ブロッコリー黒すす病菌の種同定について	桧山北部農業改良普及センター	8 月 29 日
フェロモントラップの色について	渡島農業改良普及センター 一本所	9 月 1 日

名 称	相手方	月 日
そばの稔実不良と収量低下要因について	福島町千軒農業者	9 月 3 日
ナスとササゲの葉の褐変	北斗市民	9 月 5 日
秋植えカーネーションの母の日出荷に向けた白色 LED の設置条件について	七飯町生産者	10 月 6 日
秋植えカーネーションの母の日出荷に向けた白色 LED の設置条件について	七飯町生産者	10 月 14 日
「いわいくろ」の道外での栽培可否について	渡島農業改良普及センター	10 月 29 日
昨年「つるの子」から「ゆめのつる」に変えたが、低収だった。何かよい品種はないか。	函館市生産者	11 月 10 日
地学の授業で土壌断面調査をしたところ、粘土層の下に茶褐色の層が見られた。この層について、生成由来を教えてください。	大野農業高校教師	11 月 11 日
「とよまどか」の収量性などはどうか。	函館市生産者	11 月 13 日
ねぎの腐敗病が発生する要因に土壌が関連するのかについて	渡島農業改良普及センター	11 月 19 日
道南農試が参画して開発した新規土壌還元消毒資材「糖含有珪藻土」は市販されているか？	胆振農業改良普及センター	12 月 16 日
黒大豆と黄大豆を並べて栽培したら黄大豆のみ種子が紫色になったが食べて大丈夫か？	市民	12 月 16 日
トマトキバガの薬剤試験の実施について	FMC（農薬メーカー）	1 月 7 日
シロイチモジヨトウについて	渡島農業改良普及センター渡島北部支所	1 月 16 日
京極町の「ユキホマレ R」のタンパク 38%は低いと言えるか	生産者	2 月 5 日
スイートコーンにおけるトッピングのアワノメイガ、オオタバコガに対する効果	渡島農業改良普及センター本所	2 月 6 日
アワノメイガに対する有効薬剤について	渡島農業改良普及センター本所	2 月 6 日
飼料用・子実用とうもろこしのアワノメイガについて	サナテックシード株式会社	2 月 13 日
ねぎの施肥設計について	ジェイカムアグリ（株）	1 月 28 日
ジャガイモそうか病の YI 管理について	生産者	2 月 20 日
北海道におけるトウガラシ栽培の可能性について	七飯町生産者	1 月 15 日
ガーベラの品質評価の方法について	七飯町生産者	1 月 15 日
緑肥栽培について	知内町 4H クラブ	2 月 10 日
キュウリ由来の Rhizoctonia 菌の同定方法について	（株）渡辺採種場	2 月 25 日
さつまいも及びスイートコーンの害虫防除について	北斗市萩野（一般）	3 月 17 日
水稻品種「えみまる」を中苗や成苗で栽培しても問題ないか？また「えみまる」の収量性レベルはどの程度か？	北斗市農林課	3 月 24 日
カボチャミバエの対策について	厚沢部町農業活性化センター	3 月 30 日
ハウス軟白ネギで発生したネギ葉枯病（黄色斑紋病斑）の伝染経路について	渡島北部農業改良普及センター	3 月 30 日

3) 講師等派遣

発表・講演等の名称	講師指名	月日	依頼元	内容
マメノメイガの研究状況と調査方法について	青木元彦	5月23日	檜山農業改良普及センター	檜山農業改良普及センター第1回畑作部会において、これまでのマメノメイガの研究状況について説明するとともに、普及センターで実施する調査の方法についてアドバイスした。
マメノメイガの実態調査	青木元彦	7月22日	檜山農業改良普及センター	檜山農業改良普及センター第2回畑作部会の現地圃場実態調査において、小豆の生育状況を確認するとともに、マメノメイガの発生も確認した。
ジャガイモ疫病等防除指導	池田幸子	10月5日 10月16日	農業開発研究会	サクー地域の作物病害発生状況調査、国立農業研究所との懇談、サクー地域防除指導講演会
畜産経営に向けた研修	内藤学	12月4日	松前町産業振興課	松前町肉牛改良センターにおいて研修生に黒毛和種の種雄牛の系統およびゲノム評価について講義を行った。
マメノメイガの試験結果に対するアドバイス	青木元彦	12月12日	檜山農業改良普及センター	檜山農業改良普及センター第3回畑作部会において、檜山農業改良普及センターがとりまとめたマメノメイガの現地実態調査結果について、コメントするとともに、今後の調査圃場数等についてアドバイスした。
アルストロメリア春植え加温周年切り作型における環境制御技術	菅原魁人	2月12日	檜山振興局	令和7年度に新たに普及奨励・普及推進並びに指導参考事項となったアルストロメリアの環境制御技術について説明した。
露地野菜に対するプラスチックを用いない肥効調節型肥料の施用効果	田村救	2月12日	檜山振興局	令和7年度に新たに指導参考事項となった化学合成緩効性肥料を用いた施肥法について説明した。
花き栽培について	菅原魁人	2月13日	檜山南部花卉振興会	栽培品目の基本的な管理方法と植物生育の基礎について説明した。
2025年度醸造用ぶどうにおける害虫の発生状況～アカガネサルハムシとイッシキブドウトリバを例に～	青木元彦	2月25日	渡島総合振興局	令和7年度道南ワインアカデミーにおいて、2025年度の有機栽培醸造用ぶどう園地における害虫の発生状況について説明した。
アルストロメリア春植え加温周年切り作型における環境制御技術	菅原魁人	2月25日	日高振興局	令和7年度に新たに普及奨励・普及推進並びに指導参考事項となったアルストロメリアの環境制御技術について説明した。
花き生産における統合環境制御盤の導入促進	内藤学	2月27日	渡島地域農業技術支援会議農業関係者会議	革新課題として実施した花き生産における統合環境制御盤の導入促進の調査結果について、農業支援会議地域関係者会議において情報提供した。

3. 参観・視察者対応

視察・見学者名	受入月日	人数
富山県 上市町農業委員会	6月26日	15
北海道クミアイ安全防除推進協会	7月31日	20
函館地区施肥防除合理化推進協議会	8月5日	30
黒石市認定農業経営者協会	8月8日	15
十和田おいらせ農協稲作振興会藤坂支部	8月25日	15
板柳町農業組合連合会	8月25日	15
(一社)北海道農産協会	8月25日	7
学校法人八紘学園北海道農業専門学校	9月25日	4
平賀水稻採種組合	10月20日	16
峰延農業協同組合(農協理事)	11月7日	12
鶴川蔬菜園芸振興会 ニラ部会	11月20日	10
北後志地方農業員会連合会	11月27日	14
新冠町農業協同組合アスパラ生産部会	2月9日	12

VII その他の活動

1. 職員研修

1) 専門研修Ⅰの派遣状況

- ・北海道の施設野菜・花きに今後求められる環境制御技術の習得(1名) R7.4.1～8.15(つくば市)

2) 専門研修Ⅱの派遣状況

- ・令和7年度花き研究シンポジウム(1名) R7.10.7～8(つくば市)
- ・令和8年度日本植物病理学会大会(1名) R8.3.26～28(枚方市)

2. 主催事業等

1) 令和7年度農試公開デー

①日時：令和7年8月6日(木)13～15時、参加者185名

②内容：ア)相談コーナー：家庭菜園・作物栽培、肥料、病虫害診断

イ)体験：花の染色、お米の食味試験体験、バードコールづくり(林試道南支場)

ウ)場内見学：イネの品種あれこれ、サツマイモの栽培

エ)展示コーナー：パネル展示、農業機械展示

2) 研究成果発表（道南農試共催）

名 称	開催地 日 時	出席者	内 容
道南農試新技術発表会	北斗市総合文化センターかなでーる小ホール (ハイブリッド) 2026 年 2 月 26 日	49 名	○新技術等の紹介： ● 直播栽培に向く水稻新品種！たくさんとれて美味しい「空育 198 号」 ● プラスチック被覆肥料に頼らない 露地野菜への代替資材 ● 燃料削減と増収を両立！環境制御によるアルストロメリアのハウス栽培 ● 年明けも道産かぼちゃを食卓に！おすすめ品種と省力栽培・貯蔵技術 ● りんごの腐らん病予防に追加！薬剤の摘果期散布と剪定痕塗布 ● 令和 8 年に特に注意を要する病害虫

3. マスコミ対応

取材内容	取材機関	放映・掲載	対応者
開発中のコメ種まき 新品種の確立目指す 道南農業試験場	NHK 函館放送局	4 月 3 日	丸田泰史 三澤知央
道南発 コメ価格高騰続く 生産現場に変化が種もみ不足も	NHK 函館放送局	4 月 17 日	丸田泰史 三澤知央
道南発 コメ価格高騰続く 生産現場に変化が種もみ不足も	NHK 函館放送局	4 月 28 日	丸田泰史 三澤知央
道南農試タマフクラの生みの親 鴻坂さん道南農試に赴任	函館新聞	5 月 3 日	鴻坂扶美子
道南農試道南農試の温室でコメ品種改良 82 種収穫	北海道新聞	7 月 29 日	丸田泰史
道南農試道南農試で真夏の稲刈り 品種育成より速く	函館新聞	7 月 24 日	丸田泰史
道南農試世代促進温室で水稻収穫～道南農試 2 期目の種子確保～	日本農業新聞	7 月 30 日	丸田泰史
道南農試真夏に水稻播種 2 期目を丁寧に	日本農業新聞	8 月 18 日	丸田泰史
道南農試農作物の病気 研究員が解説 札幌で来月セミナー	北海道新聞	10 月 29 日	三澤 知央
品種開発より早く 道南農試で冬の稲刈り	函館新聞	11 月 28 日	丸田泰史
リゾクトニア菌の新グループ発見	函館新聞	1 月 20 日	三澤 知央
道南新技術発表会を 26 日に 北斗市で	日本農業新聞 道内版	2 月 4 日	三澤 知央
植物の病害研究する道南農試研究主幹 三澤知央さん	北海道新聞 道南版	2 月 7 日	三澤 知央
道総研 3 農試 水田で猛暑の影響 公表データから判明	日本農業新聞 道内版	2 月 12 日	丸田泰史
植物病理学分かりやすく YouTube「道総研チャンネル」 道南農試・三澤さん初登場	函館新聞	2 月 21 日	三澤 知央

4. 委員会活動

1) 情報システム委員会

①構 成：委員長；江原 清（生産技術グループ主査（栽培環境））、委員；内藤学（生産技術グループ主任主査（地域支援））、丸田泰史（作物病虫グループ研究主任）、石川大樹（総務課技師）、大平誠（協力、技術普及室主任普及指導員）

②活 動：イントラネットの管理およびホームページの修正および更新（計13回）を行った。主な更新事項は以下のとおり。

- ア 道南農試主催行事等に関するお知らせ
- イ 作況報告
- ウ 道南農試年報の掲載

2) 施設管理委員会

①構 成：委員長；櫻井道彦（生産技術グループ研究主幹）、委員；三澤知央（作物病虫グループ研究主幹）、森田哲也（総務課長）、三上幸規（総務課主査（総務））、江原清（生産技術グループ主査（栽培環境））、鴻坂扶美子（作物病虫グループ主任主査（作物））、青木元彦（作物病虫グループ主査（病虫））

②活 動：令和8年1月27日に第1回施設管理委員会を実施し、次年度に向けた備品整備要望および施設整備計画について協議した。

3) 業務委員会

①構 成：委員長；三澤知央（作物病虫グループ研究主幹）、委員；竹内達也（作物病虫グループ専門主任）、丸田泰史（作物病虫グループ研究主任）、田村救（生産技術グループ研究職員）

②活 動：4月から10月の毎週木曜日に業務委員会を開催し、作業計画の立案及び人員の配置等について協議した。水田縮小計画後の圃場の利用指針を策定した。

4) 安全衛生委員会

①構 成：議長；三好智明（場長） 委員：五十嵐俊成（研究部長）、森田哲也（総務課長）、三上幸規（総務課主査（総務））、櫻井道彦（生産技術グループ研究主幹）、三澤知央（作物病虫グループ研究主幹）、青木元彦（労組支部長、11月まで）、内藤学（労組支部長、12月から）竹内達哉（労組推薦）

②活 動：毎月1回開催し、安全衛生に関する各取組を実施した。

5) 図書委員会

①構 成：委員長；青木元彦（作物病虫グループ主査（病虫））、委員；委員：石川大樹（総務課）、岩崎麻美（作物病虫グループ）、田村 救（生産技術グループ）、大平誠（協力、技術普及室主任普及指導員）

②活 動：集報等の希望配布のとりまとめ、受け入れ図書・資料の整理を行った。

6) 研修・参観案内委員会

①構 成：委員長；五十嵐俊成（研究部長）、委員；小原広昭（総務課主任）、櫻井道彦（生産技術グループ研究主幹）、三澤知央（作物病虫グループ研究主幹）、高田勲（協力、技術普及室上席普及指導員）

②活 動：令和7年6月3日に参観案内資料（ほ場配置図、試験概要など）をもとに場員、振興局および普及センター職員で参観案内リハーサル（試験内容の説明）を実施した。

7) 土壌病虫害場内対策検討委員会

①構 成：委員長；五十嵐俊成（研究部長）、委員；森田哲也（総務課長）、櫻井道彦（生産技術グループ研究主幹）、三澤知央（作物病虫グループ研究主幹）、青木元彦（作物病虫グループ主査（病虫））、竹内達哉（作物病虫グループ専門主任）

②活 動：令和7年9月1日に委員会を開催。令和7年は土壌病害の発生は認められていない。引き続き植物体の適切な処理と土壌消毒の実施により試験の継続を認めることとし、令和7年H2、F4圃場の消毒を実施した。運営要領のグループ名を改定した。9月の庁内会議で承認された。

8) 場代表連絡員等

(1) 情報システム運営委員

①委 員：江原 清（生産技術グループ主査（栽培環境））

②活 動：情報システムの運営管理のために、道総研本部および農業研究本部との連絡調整、ウェブアクセシビリティ向上に向けたHPの修正等の業務を行った。

(2) 植物遺伝資源連絡員

①委 員：鴻坂扶美子（作物病虫グループ主任主査（作物））

②活 動：11/6にWeb開催。遺伝資源の保存や調査に関する事項が報告され、道南農試に係わる部分は該

当がなかった。

(3) 北農連絡員

①委 員：田村 救（生産技術グループ研究職員）

②活 動：北農の発行などについて、北農会との連絡調整を行った。

(4) 図書連絡委員

①委 員：青木元彦（作物病虫グループ主査（病虫））

②活 動：道総研農試報告、集報、資料について、配布希望のとりまとめを行った。

(5) 作況気象連絡委員

①委 員：鴻坂扶美子（作物病虫グループ主任主査（作物））

②活 動：作況報告に用いる道南農試の季節データを「てん蔵」の季節調査票に登録した。

5. 場内研修

研修等名	主な内容	開催日
契約職員研修	契約職員の仕事、給料、休暇等及び農作業安全、ハラスメント等に関する説明	4月11日 5月2日
農作業事故防止呼びかけ	掲示板により事故防止啓発・注意喚起	随時
熱中症注意情報呼びかけ	掲示板により事故防止啓発・注意喚起	夏季間
交通安全研修	交通安全全般に係る注意事項等	8月16日
北海道シェイクアウト訓練	地震発生時の安全確保行動を身につける防災訓練	9月1日
特別健康診断	農薬散布作業従事者等が受診	10月2～10日
職場環境測定（1回目）	道総研通知に基づく環境測定	10月15日
健康づくりセミナー	検診結果と生活習慣病予防及び腰痛になりにくい転びにくい体づくり講習	11月20日
健康診断	巡回健康診断受診	12月18日

6. 表彰・資格

資 格	取得者名	取得年月
危険物取扱者	岩崎 麻美	令和7年12月
第一種衛生管理者	櫻井 道彦	令和7年11月
化学物質管理者講習（取扱事業場向け）修了証	櫻井 道彦	令和7年7月
保護具着用管理責任者教育学科修了証明書	三澤 知央	令和7年7月

7. 外部委員会等への参加

1) 学会役員・委員

名 称	機関名	氏名
日本水稲品質・食味研究会副会長	日本水稲品質・食味研究会	五十嵐俊成
日本応用糖質科学会北海道支部副支部長	日本応用糖質科学会	五十嵐俊成
日本植物病理学会 原著編集委員	日本植物病理学会	三澤知央
日本植物病理学会 病名委員	日本植物病理学会	三澤知央
日本植物病理学会 診断研究会幹事	日本植物病理学会	三澤知央
北日本病害虫研究会 原著編集委員	北日本病害虫研究会	三澤知央
ジャパンフラワー強化プロジェクト推進事業 異常気象（高温）に対応したカーネーション生育制御技術の開発・実証 検討委員	農林水産省	菅原魁人
北海道園芸談話会幹事（研修等）	北海道園芸談話会	江原 清

- | | |
|-------------|----|
| 2) 技術審査 | なし |
| 3) 展示会等への出展 | なし |
| 4) 研究会の開催 | なし |

Ⅷ 自己点検

1. 令和7年度計画に係る項目別実績の自己点検結果

リストNo.	項 目	件数等		
		R7	R6	R5
0	各機関へ直接寄せられたニーズ把握件数	0	0	0
1	研究成果発表会・企業向けセミナーの開催件数	1	0	0
2	研究会等の開催件数	0	0	0
3	展示会等への出展件数	0	0	0
4	研究報告書の発行件数	0	0	1
5	技術資料の発行件数	0	0	1
6	その他紙媒体発行件数	0	0	0
7	普及組織との連絡会議等開催件数	9	14	14
8	企業等へ訪問し広報活動した件数	0	0	0
9	行政や企業等で活用された成果の数	0	0	0
12	研究成果発表会・企業向けセミナーによる公表件数	12	0	3
13	研究会における公表件数	1	1	0
14	学会誌等の掲載件数 ①学会誌	1	2	2
14	〃 ②雑誌（専門誌、商業誌）	3	4	0
14	〃 ③書籍	3	0	0
14	〃 ④新聞	11	0	5
14	〃 ⑤その他	0	0	0
15	研究報告書での発表件数	0	1	0
16	学会やシンポジウム等での発表件数	2	5	13
17	電子媒体による公表件数	2	0	0
18	プレスリリース、定例報道懇談会の件数	0	0	0
19	学会役員・委員件数	11	11	10
20	技術相談の件数	64	73	58
21	技術指導の件数	0	51	70
22	講師等派遣の件数	11	13	10
26	研修会・講習会の開催件数	9	6	1
26	〃 参加人数	131	62	3
27	研修者の受入件数	2	1	0
27	〃 受入人数	28	21	0
28	連携協定先との事業の実施件数	0	0	0
29	道関係部との連絡会議等の開催件数	2	2	2
30	市町村との意見交換等の開催件数	1	1	0
31	関係団体との意見交換等の開催件数	2	0	0
32	道民意見把握調査の回答数	180	97	1
33	出前授業の実施件数	1	1	2
35	国内研修Ⅱ外部講師招聘・受け入れ件数	0	0	0
36	国内研修Ⅰの派遣件数	1	0	0
37	国内研修Ⅱの派遣件数	2	2	3
38	道民向けイベントの開催件数	1	1	1
38	〃 延べ来場者数	180	155	63
42	ホームページ発信・更新件数	13	10	12
46	職場研修開催件数	4	5	4
47	安全衛生委員会等開催件数	20	19	18
48	機器設備の点検状況	随時	随時	随時
49	その他職場研修	随時	随時	随時
50	グリーン購入の金額	517	419	227
51	視察・見学者の受入件数	14	12	13
51	〃 受入人数	195	139	182

付表 1. 作物標準栽培法の概要

各試験に共通する水稻、畑作物についての当場の標準栽培法は、下記のとおりであるが、特殊なものについては各試験ごとに記載する。

作物名	栽培方法	苗代種類	選 種	播種期	苗 代 (1 m ²)		
					基肥	追肥	播種量
水 稻	中苗栽培	冷 床	塩水選 (1.06)	4月中下旬	N = 5.6g P ₂ O ₅ =11.1g	N=1g/箱	500g散播
	稚苗栽培				K ₂ O = 9.4g	N=1g/箱	1kg散播

作物名	栽培方法	施肥量(kg/a)			移植期	畦幅×株間 (cm)	m ² 当 株数	一株 本数	病虫 防除
		基 肥	追肥	同時期					
水 稻	中苗栽培	N = 0.75 P ₂ O ₅ = 0.91	—	—	5月下旬	33×12	25株	3	3回
	稚苗栽培	K ₂ O = 0.61						~ 4	

備考 除草剤：初中期一発剤フロアブル 50ml/a、後期は発生に応じて適時実施。

堆 肥：100kg/a。

作物名	施肥量(kg/a)					畦幅×株間 (cm)	播種期 (月日)	1株本 数	中耕	除草	防除
	堆肥	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	MgO						
大 豆	0	0.15	1.10	0.75	0.35	60×20	5月下旬	2本	3回	3回	9回
小 豆	0	0.30	1.20	0.70	0.25	60×20	6月上旬	2本	3回	3回	6回

備考 防除：生育の殺菌剤・殺虫剤ののべ防除回数。

付表 2. 土壌の理化学的特性

土壌条件：中粗粒褐色低地土（一部礫質褐色低地土）

（1）水田

層 厚	国際法粒径組成 (%)					三相分布 (%)			
	粗砂	細砂	シルト	粘土	土性	固相	液相	気相	孔隙率
0～12cm	23.9	40.2	23.3	12.6	L	44.7	45.7	9.6	55.3
～21	19.1	40.3	18.7	21.9	CL	49.2	49.2	3.9	53.1
～35	6.1	37.7	40.2	16.1	CL	49.1	37.4	13.5	50.9

層 厚	pH		T-C (%)	T-N (%)	C/N	Y 1	塩基交換 容 量 (me/100g)	リン酸 吸収 係数
	H ₂ O	KCL						
0～12cm	5.9	4.9	2.2	0.18	12.2	1.0	18.0	846
～21	5.1	4.0	1.2	0.12	9.7	10.2	17.6	742

（2）畑土壌

層 厚	国際法粒径組成 (%)					容 積 重 (g/100cc)	孔隙率 (%)	有効態 リン酸 (mg/100g)	リン酸 吸収 係数
	粗砂	細砂	シルト	粘土	土性				
0～14cm	12.1	48.4	24.7	14.8	L	129	50.3	45.5	827
～30	0.5	37.6	45.2	16.7	CL	129	49.9	43.5	1374

層 厚	pH		T-C (%)	T-N (%)	C/N	Y 1	塩基交 換容量 (me/100g)	交換性塩基 (me/100g)		
	H ₂ O	KCL						Ca	Mg	K
0～14cm	5.3	4.6	2.3	0.19	12.2	3.6	22.5	9.4	1.5	1.0
～30	5.0	5.0	1.0	0.11	9.5	0.7	27.7	18.2	3.5	0.5

令和 7 年度
北海道立総合研究機構
道南農業試験場年報

令和 8 年 6 月

地方独立行政法人北海道立総合研究機構
農業研究本部道南農業試験場

〒041-1201 北海道北斗市本町 680 番地

TEL (0138) 77-8116

FAX (0138) 77-7347

E-mail donan-agri@hro.or.jp

ホームページ <https://www.hro.or.jp/agricultural/research/dounan/>
